

『資本論』第1巻第4篇 相対的剰余価値の生産

第13章 機械設備と大工業

第5節 労働者と機械との闘争

「資本家と賃労働者とのあいだの闘争は、資本関係そのものとともに始まる。」(451)

「機械の採用以後にはじめて、労働者は、資本の物質的な実存様式である労働手段そのものにたいしてたたかう。労働者は、資本主義的生産様式の物質的基礎としての、生産手段のこの特定の形態にたいして反逆する。」(451)

ラダイト運動。

「労働者が、機械設備をその資本主義的充用から区別し、それゆえ彼の攻撃を物質的生産手段そのものからその社会的利用形態に移すことを学ぶまでには、時間と経験が必要であった。」(452)

「マニュファクチュア時代の著述家たちにあつては、分業は、主として、潜勢的に労働者に取って代わる手段として理解されていても、現実には労働者を駆逐する手段として理解されてはいない。」(452)

「労働者が、羊、馬などの労働手段によって駆逐される限りでは、直接的な暴力行為が、この場合まず第一に産業革命の前提をなす。まず労働者が土地から追い出され、それから羊がやってくる。」(453～454)

「機械としては、労働手段はただちに労働者そのものの競争者となる。」(454)

「資本主義的生産の全体系は、労働者がその労働力を商品として売ことを基礎にしている。・・・道具の操作が機械の役目となるやいなや、労働力の使用価値とともにその交換価値も消滅する。労働者は、通用廃止になった紙幣と同じように売れないものとなる。労働者階級のうち、機械設備によってこのように余剰人口に、すなわち資本の自己増殖にもはや直接に必要なでない人口に、転化された部分は、一方では、・・・没落し、他方では、・・・労働市場を氾濫させ、それゆえ労働力の価格をその価値いかに低下させる。」(454)

「資本主義的生産様式が一般に、労働者に相対する労働条件および労働生産物に与える、独立化され疎外された姿態は、こうして機械とともに完全な対立にまで発展する。それゆえに機械とともに、はじめて、労働手段にたいする労働者の粗暴な反逆が現れてくる。」(455)

「労働手段が労働者を打ち殺す。この直接的対立は、確かに、新しく採用された機械設備が、伝来の手工業的またはマニュファクチュア的経営と競争するたび、もつとも明白に現われる。しかし、大工業そのものの内部においても、機械設備の絶え間のない改良および自動体系の発達とは、類似の作用をする。」(455)

「機械設備は、つねに賃労働者を『過剰』にしようとする優勢な競争者として作用するだけではない。それは、資本によって、賃労働者に敵対的な力能として、声高かつ意図的に、宣言されまた取り扱われる。それは、資本の専制に反対する周期的な労働者の蜂起、

ストライキなどを打倒するためのもっとも強力な武器となる。」(459)

## 第6節 機械によって駆逐された労働者にかんする補償説

### <補償説>

「労働者たちを駆逐するすべての機械設備が、いつの場合も同時にまた必然的に、まったく同じ労働者たちを就業させるのに十分な資本を遊離させる」との一連のブルジョア経済学者たちの主張＝補償説(461)

### <補償説に対するマルクスの批判>

壁紙製造所の例；

$3000C + 3000V \Rightarrow 4500C + 1500V$  (1500Vが1500Cへ) 資本構成の高度化

「資本の遊離ではなく、労働力と交換されることをやめる一形態(不変資本)に資本が拘束される」＝可変資本から不変資本への転化、就業させる労働者数の減少(462)

新しい機械設備の製作が多く機械工を就業させることが解雇された壁紙製造工にたいする補償になるだろうか？→「機械設備の製作は、せいぜいのところ、機械設備の使用が駆逐するよりも少ない労働者しか雇用しない。」(462)

「経済学的には、機械設備は生活手段を、労働者のために遊離させる、あるいは労働者を使用するための資本に転化させる」(463)

この生活手段は、解雇された労働者にとっては、資本としてではなく商品として実存(減少した1500V部分)。購買者から非購買者へ転化。生活手段としての商品の需要が減少。→商品の市場価格が下落→それらの商品の生産に従事する労働者の移動→「これまで生活必需品を生産していた資本の一部分は、ほかの形態で再生産される」(消費財部門から生産財部門へ)(463)

需要供給の法則。機械設備は、それが採用される生産部門だけでなく採用されない生産諸部門においても「労働者を街頭に投げ出す」(464)

「機械設備によって駆逐される労働者たちは、作業場から労働市場へ投げ出される」(464)

「この哀れな連中は、分業によって不具化されているので、彼らのもとの労働範囲以外ではほとんど価値がなく、彼らが入口を見いだすのは、ただ、わずかの、低級な、したがって絶えず人があふれていて、賃金の低い労働諸部門においてである。」(464)

機械設備の資本主義的使用から生ずる問題(労働日の延長、労働の強度を高める、自然力によって人間を抑圧、生産者を貧困化)(465)

「機械設備は、それが採用される労働諸部門においては、必然的に労働者を駆逐するとはいえ、他の労働諸部門においては雇用の増加を呼び起こすことがありうる。しかしこの作用は、いわゆる補償説とはなにも共通するものをもたない。」(466)

### <機械設備のもたらす結果>

「ある労働対象がその最終形態にいたるまでに通過しなければならない前段階または中間段階を、機械設備がとらえるならば、まだ手工業的またはマニュファクチュア的に経営

されている作業場に機械製品がはいり込んでいくので、そこでは、労働材料とともに、労働需要が増加する。」(467~468)

機械経営は、マニファクチュアとは比較にならないほど広く社会的分業を推進（∴機械経営の高度に増大した生産力）(468)

機械設備は、剰余価値と剰余価値が表現される生産物総量を増加。(468)

→資本家階級とその取り巻きを増加→奢侈品生産の成長

大工業がつくり出す世界市場での諸関連。

運輸業における労働需要。運輸業が多数の新しい亜種に分化。

「労働者の相対的な減少にともなう、生産諸手段および生活諸手段が増加することにより、運河、ドック、トンネル、橋などのように、その生産物が遠い将来においてのみ実を結ぶような産業部門において労働の拡大が引き起こされる。」(469)

「大工業の諸領域で異常に高められた生産力は、他のすべての生産領域における労働力の搾取の内包的および外延的増大を現実にともないながら、労働者階級のますます大きな部分を非生産的に使用することを可能にし、・・・『召し使い階級』の名のもとで呼ばれる昔からの家内奴隷を、絶えず大量に再生産することを可能にする。」(469)

#### 第7節 機械経営の発展にともなう労働者の反発と吸引。綿業恐慌。

<就業労働者数の相対的減少は、その絶対的増加と両立>

$200C+300V \Rightarrow 400C+100V$  (3分の2が解雇)

$400C+100V$  が3倍に拡張すると  $1200C+300V$  (産業革命前と同数の労働者数)

$400C+100V$  が4倍に拡張すると  $1500C+400V$  (使用労働者数が100人増加)

「機械制度が進歩するたびに、機械設備や原料からなる不変資本部分は増大するが、他方、労働力に支出される可変資本部分は減少する」(473)

<純事実的諸関係>

機械経営が、ある産業部門で手工業やマニファクチュアを犠牲に拡張する時期

「機械がはじめてその作用範囲を獲得するこの最初の時期は、機械のおかげで生産される異常な利潤のために、決定的に重要である。」(474)

「この利潤は、・・・加速的な蓄積の一源泉をなすだけでなく、絶えず新たな投資へ突き進む社会的追加資本の大きな部分を、有利な生産諸部門に引き入れる。」(474)

工場制度 (Fabrikwesen) がある程度普及し、一定の成熟度に到達する時期

この経営様式 (Betriebsweise) は突発的で飛躍的な拡大能力を獲得。

「この拡大能力はただ原料と販売市場にかんしてのみ制限を受けるにすぎない。」(474)

機械設備は原料の直接的増加を引き起こす (綿繰り機と綿花生産)

「他面、機械生産物の安さおよび変革された運輸・通信制度は、外国の諸市場を征服するための武器である。」(474~475)

外国市場の手工業的生産物を破壊→外国市場を強制的に原料の生産地へ (東インド)

大工業の諸国における労働者の不断の「過剰化」

→促成的な移住と外国の植民地化を促進（オーストラリア）

→機械経営の主要立地に照応する新しい国際的分業。地球の一部を、工業を主とする生産地である他の部分のために、農業を主とする生産地に転化。

＜産業循環＞

工場制度の巨大な飛躍的な拡張可能性と世界市場への工場制度の依存性  
熱病的な生産とそれに続く市場の過充。市場の収縮とともに麻痺が現れる。

産業の生活は、

中位の活気⇒繁栄⇒過剰生産⇒恐慌⇒停滞という諸時期の一列

「機械経営が労働者の就業に、それとともにその生活状態に押しつける不確実性と不安定性とは、産業循環の諸時期のこのような変動にともなう正常なものとなる。」(476)

工場労働者の数の増加は、工場に投下される総資本がはるかに急速な割合で増大することが条件。

「労働者は、不断に、反発されたり吸引されたり、あつちにやられたりこつちにやられたりするのであつて、しかも徴募されるものの性、年齢、および熟練さは絶えず変動する。」

(工場労働者の運命。イギリス綿工業) (477)

1770～1815年 イギリス綿工業の最初の45年、世界独占の時代。恐慌と沈滞は5年。

1815～1863年 第二期。不況と沈滞の28年、回復と好況の20年。

(1815～1830年 ヨーロッパ大陸およびアメリカ合衆国との競争)

1833年～ アジアの諸市場の拡大(「人種の絶滅」)

1846～1863年 中位の活気と繁栄の8年、不況と沈滞の9年)

## 第8節 大工業によるマニファクチュア、手工業、および家内労働の変革

### a 手工業と分業とにもとづく協業の廃除

「機械設備は、手工業にもとづく協業と手工業的分業にもとづくマニファクチュアとを廃除する。」(483)

草刈機が草刈人の協業に取って代わる(手工業にもとづく協業の廃除)

縫針製造用の機械(手工業的分業にもとづくマニファクチュアの廃除)

作業機そのものはふたたび手工業的経営の基礎となりうる。「しかし、機械設備にもとづくこのような手工業経営の再生産は、工場経営への過渡をなすにすぎない」(484)

＜工場経営への移行＞

大規模生産が必要でない諸工業の例(封筒製造、鉄ペン製造)

手工業経営⇒マニファクチュア⇒工場経営

### b マニファクチュアおよび家内労働におよぼした工場制度の反作用

機械設備のマニファクチュアへの侵入。

全体労働者（結合された労働人員）の構成が根底から変革される。

「チープ・レイバー」の使用。分業の計画も「チープ・レイバー」の使用が基礎に。

いわゆる近代的家内工業にも該当。工場、マニファクチュア、問屋の外業部に転化。

「安くて未成熟な諸労働力の搾取は、近代的マニファクチュアでは本来の工場におけるよりもいっそう恥知らずなものとなる。」(486)

#### <家内労働の搾取とその原因>

「この搾取は、いわゆる家内労働においては、マニファクチュアにおけるよりもさらに恥知らずなものとなる。」(486)

労働者の抵抗能力の減退。盗人的寄生虫の介入。機械経営（マニファクチュア経営）との闘争。貧困による労働諸条件の欠如。就業の不規則性。労働者間の苛烈な競争。

「機械経営によってはじめて体系的に完成された生産手段の節約は、同時に、最初から労働力のきわめて容赦のない浪費であり、労働機能の正常な諸前提の略奪であるが、この節約は、いまでは、ある産業部門において労働の社会的生産力と結合された労働過程の技術的基礎とが未発達であればあるほど、その敵対的で殺人的な側面をますますあらわにする。」(486)

#### c 近代的マニファクチュア

金属マニファクチュア。

新聞印刷所、書籍印刷所。「屠殺場」

過度労働の諸例（製本所、ロープ製造所、製塩所、ロウソクマニファクチュア、ぼろ選別）。

近代的マニファクチュアにおける労働諸条件の資本家的節約。

#### d 近代的家内労働

釘製造工場。

レース製造工場（二歳か二歳半の児童）と麦わら編み工場（三歳と四歳のあいだから）の例。適切な例か？

#### e 近代的マニファクチュアおよび近代的家内労働の大工業への移行。それらの経営諸様式への工場法の適用によるこの変革の促進

「婦人の労働力および未成熟の労働力のむきだしの濫用、あらゆる正常な労働条件および生活条件のむきだしの強奪、そして過度労働および夜間労働のむき出しの残虐さ——これらによる労働力の低廉化は、ついには、踏み越えられない一定の自然的諸制限に突きあたる。」(494)

商品の低廉化、資本主義的搾取一般も自然的諸制限に突き当たる

⇒機械設備を採用し、分散した家内労働（マニファクチュア）を工場経営に急転化  
「服装品」の生産の例。

「この部面のマニファクチュアの起源は、主として需要の変動にいつでも出動できる一軍を手もとにおこうとする資本家の要望によるものであった。」（495）

婦人服製造業、製縫業、製靴業、縫物業、製帽業などの生産部面の無数の部門全体を一様にとらえた決定的に革命的な機械＝マシン

「社会的経営様式の変革という、生産手段の変化のこの必然的な産物は、過渡的諸形態が多様に錯綜するなかで遂行される。」（496）

#### <マシンによる製造の実例>

「いまのイギリスで実際に広く行われているのは、資本家がかなり多数のマシンを自分の建物に集中し、次いでそのマシン生産物を家内労働者軍のあいだに配布して、それ以後の加工をさせるという制度である。」（497）

#### <工場法の適用によるこの変革の促進>

マニファクチュア、手工業、家内労働の工場経営への変革

それ以前から、マニファクチュア、手工業、家内労働は、大工業の影響の下で変形、分解され、歪められる。

「自然発生的に進行する産業革命は、・・・工場法が拡張されることによって人為的に促進される。」「生産手段のより大きな集中およびそれに照応する労働者のより大きな集合が起こる。」（499）

マニファクチュアと家内労働とのあいだの中間諸形態、家内労働そのもの（安価な労働力の無制限の搾取が競争能力の唯一の基礎）の地盤沈下

「工場経営の本質的条件は、とくに労働日の規制をうけてからは、結果の正常な確実性、すなわち、与えられた時間内に一定分量の商品または所期の有用効果を生産することである。」（499）

工場法は、マニファクチュア経営の工場経営への転化に必要な物質的諸要素を温室的に成熟、資本投下の増大の必然性によって、小親方の没落と資本の集中とを促進。

#### <生産の無政府性>

産業循環の一般的な周期的変動、各生産部門における特殊な市場の動揺、いわゆるシーズン、大注文の突発性

「工場法の適用をまだ受けていない工場とマニファクチュアでは、いわゆるシーズン中に、突然の注文によって突発的に、恐ろしいほどの過度労働が周期的に支配する。」（502）

#### <労働日の規制>

「労働日の規制は、殺人的な、無内容な、それ自体大工業の制度に不適當な流行の気まぐれにたいする最初の合理的抑制である」（503～504）

「資本は、・・・労働日を強制的に規制する『一般的な議会制定法の圧力下でのみ』、このような変革に同意するのである。」（504）

## 第9節 工場立法（保健および教育条項）。イギリスにおけるその一般化

「工場立法、すなわち社会が、その生産過程の自然成長的姿態に与えたこの最初の意識的かつ計画的な反作用は、すでに見たように、綿糸や自動紡績機や電信と同じく、大工業の必然的産物である。」（504～505）

### <労働日以外の条項についての考察>

保健条項。

スカッチング・ミルの悲惨な実例。

「資本主義的生産様式には、もっとも簡単な清潔・保健設備でさえ、国家の強制法によって押しつけられる必要があるということ、これ以上にこの生産様式をよく特徴づけうるものがほかにあるだろうか？」（505）

教育条項。

「初等教育を労働の強制的条件として宣言」（507）

筋肉労働と教育・体育との結合。

工場制度から未来の教育の萌芽。

### <大工業の特性>

「大工業は、一人の人間全体を生涯にわたって一つの細部作業に結びつけるマニファクチュア的分業を技術的に廃除するが、同時に、大工業の資本主義的形態は、この分業をいっそう奇怪なかたちで再生産する。」（508）

「作業場の内部におけるマニファクチュア的分業についてあてはまることは、社会の内部における分業についてもあてはまる。」（509）

“秘伝技”

「人間にたいして彼ら自身の社会的生産過程をおおい隠し、種々の自然発生的に分化された生産諸部門を互いに謎にし、また各部門の精通者にとってさえ謎にしていたヴェールを、大工業は引き裂いた。」（510）

「各生産過程を、それ自体として、さしあたりは人間の手をなんら考慮することなく、その構成諸要素に分解するという大工業の原理は、技術学というまったく近代的な科学をつくり出した。」（510）

「近代的工業は、機械設備、化学的工工程、その他の方法によって、生産の技術的基礎とともに、労働者の諸機能および労働過程の社会的諸結合を絶えず変革する。近代的工業は、それとともに社会の内部における分業も絶えず変革し、大量の資本および大量の労働者がある生産部門から他の生産部門へ間断なく投げ入れる。」（511）

「大工業の本性は、労働の転換、機能の流動、労働者の全面的可動性を条件づける。他方、大工業はその資本主義的形態においては、古い分業をその骨化した分立性とともに再生産する。」「この絶対的矛盾」（511）

「大工業は、労働の転換、それゆえ労働者の可能な限りの多面性を一般的な社会的生産法則として承認し、そしてこの法則の正常な実現に諸関係を適合させることを、自己の破

局そのものを通じて、死活の問題とする。」(512)

「一つの社会的な細部機能の単なる担い手にすぎない部分個人の代わりに、さまざまな社会的機能をかかわるがわる行なうような活動様式をもった、全体的に発達した個人をもつてくることを、死活の問題とする。」(512)

#### 総合技術および農学の学校

“職業学校、

「労働者階級による政治権力の不可避的な獲得が、理論的および実践的な技術学的教育のためにも、労働者学校においてその占めるべき席を獲得するであろうことは、疑う余地がない。」(512)

「一つの歴史的な生産形態の諸矛盾の発展は、その解体と新たな形成との唯一の歴史的な道である。」(512)

#### <大工業と家族制度>

「事実の力は、ついに、大工業が古い家族制度とそれに照応する家族労働との経済的基礎とともに、その古い家族関係そのものを解体するということを、いやおうなく認めさせた。」(513)

「資本による未成熟な労働力の直接的あるいは間接的な搾取をつくり出したものは、親権の濫用ではなく、むしろ逆に、資本主義的搾取様式が親権に照応する経済的基礎を廃棄することによって親権の濫用を生み出したのである。」(514)

資本主義制度の内部における古い家族制度（家父長制）の解体

家事の領域のかなたにある社会的に組織された生産過程

労働者が生産過程のためであって、生産過程が労働者のためにあるのではないという資本主義的形態

#### <工場法の一般化>

マニユファクチュア⇒工場、手工業⇒マニユファクチュア

「資本は、社会的周辺の個々の点だけで国家の統御を受けるようになると、他の点でいっそう無際限に埋め合わせをする」(515)

「競争条件の平等すなわち労働搾取の平等な制限を求める資本家たち自身の叫び」(515)

労働者階級の肉体的および精神的な保護手段としての工場立法

工場立法の一般化→資本の集中と工場の専制とを一般化

古い諸形態および過渡的諸形態を破壊、資本の直接的な支配へ

資本の支配に対する直接的な闘争の一般化

「工場立法の一般化は、個々の作業場においては、斉一性、規則正しさ、秩序、および節約を強要するが、他方では、労働日の制限と規制が技術に押しつける強大な刺激によって、全体としての資本主義的生産の無政府性と破局、労働の強度、そして機械と労働者との競争を増大させる。」(526)



「工場立法の一般化は、小経営および家内労働の領域とともに、『過剰人口』の最後の避難所を、そしてそれとともに全社会機構の従来の安全弁を破壊する。」(526)

「工場立法の一般化は、生産過程の物質的諸条件および社会的結合とともに、生産過程の資本主義的形態の諸矛盾と諸敵対とを、それゆえ同時に、新しい社会の形成要素と古い社会の変革契機とを成熟させる。」(526)

#### 第10節 大工業と農業

「大工業が、農業およびその生産当事者たちの社会的関係に引き起こす革命は、もっとあとになってはじめて述べることができる(第24章第5節)。」(527)

機械は、農業部面では労働者を「過剰化」させる点では、いっそうきびしく、また抵抗なしに作用。

「農業の部面において、大工業は、それが古い社会の堡壘である『農民』を破滅させ、彼らを賃労働者と置き換える限りにおいて、もっとも革命的に作用する。」(528)

「しかし、資本主義的生産様式は、同時に、農業と工業との対立的に形成された姿態を基礎とする、両者の新しいより高い総合、両者の結合の物質的諸前提をつくり出す。」(528)

「この資本主義的生産様式は、都市労働者の肉体的健康と農村労働者の精神生活を破壊する。しかしそれは同時に、あの物質代謝を、社会的生産の規制的法則として、また完全な人間の発展に適合した形態において、体系的に再建することを強制する。」(528)

資本主義的農業の進歩＝労働者から略奪する技術の進歩、土地から略奪する技術の進歩  
北アメリカ合衆国

「資本主義的生産は、すべての富の源泉すなわち土地および労働者を同時に破壊することによってのみ社会的生産過程の技術および結合を発展させる。」(529～530)

## 【論点】

### ①資本主義と労働者家族（家族制度）

労働力の価値は、「労働力の所有者の維持に必要な生活諸手段の価値である」（185）とした上で「労働力の生産に必要な生活手段の総額は、補充人員すなわち労働者の子供たちの生活諸手段を含む」（186）と規定されていた。（さらに、修業費が「価値の枠のなかにはいっていく」とされる）

第3節で、「機械設備は、労働者家族の全成員を労働市場に投げ込むことによって、夫の労働力の価値を彼の全家族が分担するようになる」（417）と労働力の価値分割が説かれ、第9節において「大工業が古い家族制度とそれに照応する家族労働との経済的基礎とともに、その古い家族関係そのものを解体」するとされる。資本主義経済の生成、発展後に理論上、どのような家族形態が想定されていると考えるべきか。

機械制大工業により熟練が解体され、単純労働化していくとされるのであれば、ある年齢以上の家族成員は、夫や妻を含めすべて労働力として労働市場で売買されるととらえてよいか。家事労働については、必然的に市場化が進展していくことになる。

### ②法制度の取扱い

マルクスは、「工場立法、すなわち社会が、その生産過程の自然成長的姿態に与えたこの最初の意識的かつ計画的な反作用は、・・・綿糸や自動紡績機や電信と同じく、大工業の必然的産物である」として、またそのように成立した工場立法が「資本主義的生産の無政府性と破局、労働の強度、そして機械と労働者との競争を増大」と説いている。ここでは、資本主義的生産が、工場法の成立を一種の媒介にしてさらに「成長」することが説かれるが、原理論レベルにおいて法制度（＝国家）、その成立の必然性（工場法などの）は扱えるか。

### ③労働力の互換性の二面

機械設備は、作業を労働者から機械に置換し、その労働を単純労働化することにより、労働力の互換性を高める。

マルクスは一方で「大工業は、労働の転換、それゆえ労働者の可能な限りの多面性を一般的な社会的生産法則として承認し、そしてこの法則の正常な実現に諸関係を適合させること」「一つの社会的な細部機能の単なる担い手にすぎない部分個人の代わりに、さまざまな社会的機能をかかわるがわる行なうような活動様式をもった、全体的に発達した個人をもってくることを、「死活の問題とする。」（512）と説いている。註308の例。

労働者の多面性、すなわち全体的に発達した個人が「さまざまな社会的機能をかかわるがわる行なう」ことによって担保される互換性は、単純労働化、労働の無内容化による互換性とその意味するところが異なっている。どうとらえるべきか。